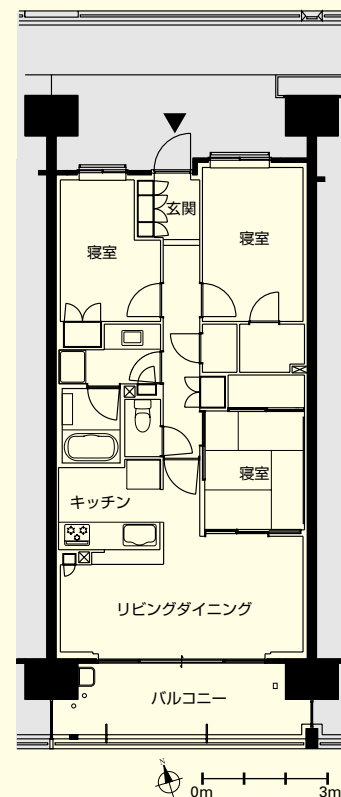


● シリーズ 私の見た日本 Vol.154

私的ナカロウカ論

申 貞仁 (シン・ジョンイン)

2013年ソウル国立大学建築学科卒業。
2014年から東京大学大学院工学系研究科建築学専攻建築計画研究室修士課程に在学中。

「ナカロウカ」との出会い

“ナカロウカ”の存在は、私にとって非常に珍妙不可思議なものであった。

普段から個人的に住宅平面に関心をもって日本の住宅平面も観察し続けた私が、どうしても納得できない存在がそこにあった。それは玄関から繋がる長く狭く暗い「中廊下」と、その「中廊下」を通過して各部屋に入っているこの国独自の平面構造だった。

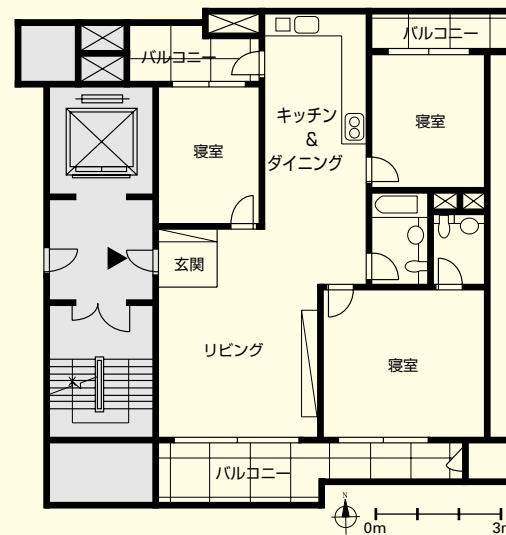
◀一般的な日本の外廊下型集合住宅の3LDK間取り(約75㎡)。玄関からリビングの間に「中廊下」がある。

私にこれが不思議に思えたのは、居間が住宅の中心に位置しながら動線の役割も担当するのが韓国住宅の一般的な特性だからだ。

私が7年間住んでいた、韓国の階段室型集合住宅の3LDK間取り(約105㎡)。

◀玄関を入るとすぐリビングになる。

文化的背景の違いにより私には日本の中廊下が空間の無駄であるだけでなく、採光や風通しにも問題を起し、何より家族間のコミュニケーションを難しくするだけの長所のあまりない空間として認識したが、プライバシー確保という側面からはある程度の納得もできた。中廊下に関する資料を探し勉強をしたら、日本の中廊下型住宅は封建制の象徴や接客本位の平面だという観点、加えて採光などの環境面から絶え間なく批判されてきたこと、それにもかかわらず今なお多くの住宅で中廊下型平面が採用され続けており、また多くの居住者は中廊下をもつ住戸を選択し、生活を営んでいるということが分かってきた。私は特に集合住宅の中廊下に注目するようになり、既往研究を調べた結果、



タワー型の集合住宅の平面分析研究においては中廊下への言及が多少みられるが、量産型の集合住宅における中廊下を対象とする研究はあまりみられないこと、また中廊下は部屋へのアクセスという動線の観点から扱われることが多く、中廊下の空間自体がもつ意味や機能、中廊下への居住者の意識を実際の住まい方から分析する研究は行われていないことが分かり、独自性のある研究が進められると考えた。実際、東京大学の建築計画研究室に進学してから、中廊下をもつ集合住宅に住んでいる人々にアンケートやインタビューを実施して話を聞くことができた。

「ナカロウカ」の再評価研究

研究の一環として、色々な居住者の中廊下に対する意識と中廊下への評価及び中廊下をめぐる住まい方を調査してみたら、新しい発見が続いた。

個人のプライバシーを重視する中廊下型平面は多くの建築家や研究者によってコミュニケーションの機会を減らすと批判されているが、例えば別々の寝室を使っている高齢の夫婦はお互いの部屋の間の中廊下というニュートラルな空間が存在することを高く評価していた。「家族」と一言で言っても、その形は急激に変化しつつあり、求めるコミュニケーションとプライバシーの間のバランスはライフスタイルやライフステージによって様々であった。

また、外部に対する住戸内のプライバシーを重視する人は、玄関を開けた時に中廊下があることを高く評価していた。外からの音や視線などを遮断するというのは、多くの居住者が共通して求めている中廊下の機能であった。この点に関しては特に、玄関からまっすぐ続く中廊下よりは、鉤型の中廊下などまっすぐでない形の方が好まれていた。

調査結果で最も面白かったのは、多くの居

※本記事の内容の一部は「居住者の住まい方からみる中廊下の評価に関する研究—建替え事業によって中廊下型が採用された郊外の集合住宅団地を調査対象として—」：申貞仁・深井祐紘・久寿米木真子・大月敏雄・西出和彦、住宅系研究報告会論文集、No.10、pp.169-178、2015年12月」に発表したものである。

住者が中廊下の意味をその物理的な性能や機能だけで評価しているのではなく、中廊下を感覚などの心理的な要因から位置付けているということだった。「家に1箇所くらいは無駄な空間が欲しい」、「他の部屋が散らかっていても中廊下さえきれいならすっきりする」、「リビングにいるカミさんに会う前の心の準備をする空間」、「長い廊下は広い家の象徴だから廊下は長ければ長いほど良い」など、調査を始める時には想像すらできなかった答えも多かった。

中廊下に置かれているモノを観察調査して、それらを3つのカテゴリーに分類してみたら、それは「装飾系」、「必要系」、「溢れ出し系」になった。「装飾系」は、お花や絵などを廊下に飾り、ゆとりの空間として設えている場合で、比較的面積の広い住戸からよく観察された。「必要系」は、出入りする時に必ず通る空間という廊下の特性を活かし、鍵や帽子、外出用の服などを廊下に保管している場合だった。「溢れ出し系」は比較的少数居住の場合に家具や生活に関するモノが廊下まで溢れ出ている場合だった。廊下での行動は「子供やペットが走る」くらいしか観察されなかったが、中廊下を個性を表す空間、生活に役立つ空間として利用したいという要求は認められた。

これらの研究をしてみて、中廊下の必要性や好まれるあり方は一概には捉えられず、住まい方によって大きく変化することが分かった。以上を踏まえ今後は、単なる中廊下の是非だけでなく、中廊下に含まれている住まいの要素を居住者の住要求にどう合致させていくかを議論する必要があると考えている。

留学を始める前から興味をもち、研究生と修士課程の時期に引き続き取り組んでいる集合住宅の中廊下空間は、一般居住者にとっては当たり前の空間として認識されることが

多く、建築家や研究者にとって中廊下とは批判の対象であることが根強い常識とされており、新しい視点や違う視点からの研究はあまり行われていない。私の中廊下の研究は、日本の建築に興味や理解をもちながらも外部者としての観点で疑問をいただくことができる立場だからこ続けられる研究であると考えている。これからも引き続き、学界でもあまり蓄積されていない、集合住宅の中廊下に関するデータを積みながら、中廊下の再評価の研究を進めたいと考えている。

中廊下研究と「ケンチクケイカク」

「建築を学ぶために日本に行く」と言うと、普通は有名建築家を思い浮かべて設計デザイン留学を考えるが耐震構造を学びに行くと想像するだろう。しかし私は「建築計画」という分野に惹かれて日本に来た。私が日本の集合住宅の中廊下に注目したのは「不思議だったから」という理由でしか説明の仕方がないが、私が興味をもつようになった空間について建築計画的プロセスを経て仮説検証をするというのは、建築計画学の発祥地とも言われる日本で留学をする最も重要な理由である。名高い建築家のおしゃれな作品に注目しがちな建築界の中で、私と私の周りの人々が普段生活している平凡な住宅と、我々の普通の住まいとの接点に関心をもって緻密な調査をするというのは、私にとってはより現実的で妥当な「建築」への近づき方に思えた。民族性とも言える住意識と経済的な合理性追求という条件のもと日本の集合住宅で典型的に現れている中廊下型平面は、外国人の目から見るととても面白い現象で、その現象を科学的な方法で分析できる学問的な土台と機会があるというのは、私が日本で建築留学をしながら受けている最も大きい利点ではナカロウカ。